

には白根山噴火の光景が書いてある

▽吉川氏より「此地秋草既に咲き亂れ居候へども暑熱は矢張り盛にして、日々の寫生に皆々風の行衛を啣ちおり候有様、これは地勢の然らしむる所(北鎖せり)なるべくと存候」云々

羽前鶴岡町より

▽「客月二十五日より古郷米澤地方に旅行いたし居候ひしが向ふに參りて得たる寫生は栗及榛の木等の綠葉のみにて莊内地方の明光に接し居りし小生が目には始めは嘔然として筆採る氣にもなれず候ひしが遂に一樹の縁や破れたる茅屋さては茶椀のかけにも却つて深き美趣のあることゝ世何處とて畫とならざるものやある、ア一吾が愚かさよと氣つきて漸く氣も進み筆も動きたる次第に御座候先生にも一度御都合よろしき時は是非當地方に一度は御來遊下されたく願上候海岸杯にも中々風光宜敷處有之候」云々(山宮允氏より)

寫生帖 (四)

■住吉で十二時茶屋へ歸つて來たら、麵麩につける砂糖を誰れか皆平げてしまった■席料二圓は高いね、赤砂糖二皿で十五錢も酷い、住吉へ往つたらふじ林といふ茶店へ立よるべからず■床几へ腰を下したらグツ／＼、オットあぶない■西照館の女中へおみやげといふて、名物新芋を買つて來て、瀛車の中へ忘れたとか忘れぬとか■石の上にも三年といふが、天王寺子の石の上

に四日も續けて座つて寫生してゐた紫式部が有た■六十の寫生隊を、見學の爲として、常盤會の紫や海考茶連が無數にやつて來た時は一寸面喰つた■僕等の學校へ常盤會から見學に來た時も、學校の宿直書記はよほど狼狽の氣味であつた■その時ワルク四角張つた人もあつたやうだ■そうと知つたら今日鉛筆などやらずに水彩で旨く描いて驚ろかしてやつたものを■モデルの西瓜は旨そうだつた■意地のキタナイ事を言ふのは誰です■いよ／＼お別れの十六日の茶話會は大に振つたね■何れも酒なしの素面であれだけのことをやるのはエライ■S先生の帽子の下の饅頭もおかしかった■二十貫君のホーキボーシは素敵なものさ■R、N君の足藝は天下一品■誰やらの滑稽催眠術はチト古いね■M、S君の落語、蓄音機、薩摩琵琶何れもお手に入つたものだ■SS君の鎌倉三代記と來たら笑絶、誰だつて腹の皮をよつたね■おトツサンの立見將軍は本職だ■K、I君の煙草盆三景は、當意即妙と申上る■M先生の夕日の畫はあまり醜弄に過ぎた■僕はホントーかと思つた■こんな事を言つても見ない人には判らない、樂屋落はこの位ひにして置ふ■まだあるよ、天王寺で寫真を撮つた時J、S君のわるくお洒落したこと

(大阪の部 終)